

「心が燃える時」

ルカによる福音書 24章 13節～35節

説教 本庄 侑子 牧師

主イエスが復活させられた日の夕暮れ時、二人の弟子がエマオという村に向かって歩いていました。主イエスがよみがえられたと聞いても、弟子たちの心は暗いままでした。主イエスの復活は彼らの常識や考えを超え出ていて、彼らの落胆を癒す知らせではありませんでした。

ほんの一週間前、主イエスは歓声に包まれていました。人々の胸は期待と興奮ではち切れんばかりでした。弟子たちも誇らしかったでしょう。このお方こそ私たちを解放してくださるお方！彼らの心は熱く燃え上がっていました。

しかし、主イエスは殺されてしまいました。残ったのは虚しさだけです。これまでの努力も、全て水の泡です。虚しさを引きずりながら、エルサレムを後にするしかありませんでした。

道すがら、二人の弟子は一連の出来事を振り返っていました。辛い出来事を分かち合うことのできる仲間はいたのです。しかし、仲間と慰め合うだけなら行き着く先は見えています。エマオに着き、元の生活に戻るしかありません。

しかしこの後、弟子たちはエルサレムに帰って行くこととなります。そこに主イエスが加わったからです。弟子たちが語り合っていると、主イエスが近づいて来て、一緒に歩き始められました。二人の弟子たちは、それが復活の主であることに気づきません。そんな弟子たちに主イエスは聖書を解き明かしてくださいました。

彼らが目指す村に着いた時、主イエスは彼らの家に入られ、「一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡」(30節)されました。すると弟子たちの目が開け、それが主イエスだと分かりました。その瞬間、主イエスの姿は見えなくなりました。

しかし彼らは、もっと大事な事実を見ることとなりました。暗い顔をして、夢が断たれたエルサレムを後にして歩んできた、あの途上に、既に主イエスがおられたのだ、と事実です。

彼らは気づきません。死んでいたような心が燃え始めていることに。その炎は、かつて自分たちの期待を振り上げていた時の炎とは違います。聖書の言葉が自分への言葉として響いてきた時に燃え始めた炎でした。

そして開かれた主の食卓。キリストの裂かれた肉であるパンと、キリストの流された血潮で

ある杯をいただきながら、主イエスの死と復活が、まさに自分たちのために起こったことを悟らされました。全てが終わったと思って立ち去ったはずのエルサレムで、主はお働きになっていた。自分たちの罪を赦すために神の独り子が十字架につけられ、よみがえられたんだ、と。

主イエスは今も私たちに近づいて聖書を解き明かし、パンを割き、杯を飲ませてくださいます。礼拝に招き、御言葉と聖餐を通して、私たちも目が開かれ、気づかされるのです。私たちが気づくよりずっと前から、悲しい顔でエルサレムを後にするしかなかったようなあの時も、主イエスは共におられた。そして、あのエルサレムで、自分たちの期待や夢をはるかに超えた、神の救いの業が起こっていたということに。

洗礼を受けるということは、こうしてエルサレムに帰っていくことなのでしょう。それまでいた場所、現実、人生は変わらない。しかし、それらの意味が全く新しくされるのです。それはまた、キリスト者の悔い改めの歩みでもあるのでしょうか。私にも、自分の期待や夢を抱いて熱く燃えていた時がありました。そのような自分の炎はことごとく消え失せてきました。しかし、そこでこそ見えてくる主イエスのお働き、神の壮大な救いのご計画がありました。

夢破れたエルサレムを後にして、失意と落胆の中、エマオに向かって歩もうとする私に主は近づいて来られ、御言葉と聖餐とをもって目を開かせ、心を燃やしてくださいました。自分ではない。主が生きて働いておられる。その中で、主がさせてくださることがある。そうして全く新しい私にさせていただいて、エルサレムに帰らされることを繰り返してきました。

最後に、私たちが直面する究極の夕暮れ、それは死でしょう。しかし、死の眠りについても、やがて夜は明け、朝が来る。それは、よみがえりの朝。そこには、私たちのために十字架について死んでくださった主イエス・キリストがおられます。死に向かう夕暮れのエマオ途上は、あの主イエスとお会いする喜びに心が燃える、復活の希望の道となるのです。

失望も落胆も、罪も死でさえも、キリストの十字架と復活を通してあらわされた神の愛から、私たちを引き離すことはできないのです。